

中井政喜著

『魯迅後期試探』

名古屋外国語大学出版会、二〇一六年

船越達志



本書の著者中井政喜先生は、日本を代表する魯迅研究者であり、すでに二冊の專著『一九二〇年代中国文芸批評論』、『魯迅探索』（ともに汲古書院を公刊しておられる。本書は、前二著の問題意識を受け継いで展開された、著者十年來の研究成果をまとめた学術書である。本書では、魯迅の文学活動を「前期」と「後期」に分けた上で、主として「後期」に焦点を当てる。一九二八年初、「無産階級革命文学」を標榜する「中国革命文学派」は、魯迅に対して「小資産階級作家」との批判を浴びせ、魯迅との間に論争（革命文学論争）が起こる。この論争の過程で、魯迅は本格的にマルクス主義文芸理論を学び、受容していく。この時期から始まる文学活動を、著者は「後期」とする。文学作品のみならず魯迅による文芸理論の翻訳、紹介文等も取り上げ、魯迅の心情に深く入り込み、考察を加えていく。

本書冒頭の三章では、「祝福」（一九二四）、「離婚」（一九二五）、「阿金」（一九三四）の諸作品に対する作品論が展開するが、それぞれに描かれた女性像の変遷が興味深い。「祝福」の祥林嫂は、二度の結婚をし、二度とも夫に死なれた寡婦である。二度目の結婚は本人の意思ではなかった。しかし二人の夫と結婚した彼女は、人々から「不清浄」と見做され、差別を受ける。旧社会における犠牲者の形象である。「離婚」の愛姑も同様に旧社会における犠牲者の形象であるが、嫁ぎ先と離婚をめぐって紛争を起し、自らの婚姻の正当性を必死に主張する姿が描かれている。一方「阿金」の阿金は、大声で世間話

をし、平気な顔で「情夫を作る」等と声高に話す傍若無人な強者である。この「三つの女性像」の変遷には、「前期」から「後期」への、魯迅のものの見方の変化が反映している。魯迅は当初、女性を中国旧社会における弱者・被抑圧者であるとのみ考えていた（「祝福」の祥林嫂）。しかし一九二五年、北京女子師範大学の紛争を目の当たりにした魯迅は、中国女性の不屈の反抗と闘争に感銘を受ける。この認識の下、「反抗・闘争する女性」として描かれたのが「離婚」の愛姑である。そして「後期」の一九三四年頃、租界都市上海において魯迅は、「旧社会における弱者・被抑圧者」の枠には収まらない、傍若無人な下層社会の女性像を認識する。それが「阿金」である。その後魯迅は、現実社会の様々な女性像を描くようになっていく。この指摘を読んで私が想起するのは、古典小説中の女性像変遷である。『水滸伝』の女性は、男を誘惑する悪女と決まっておき、その内面は殆ど描かれない。しかしその後、『金瓶梅』になると、そういった女性の複雑な内面が描かれるようになる。そして「紅樓夢」に到ると、現実の様々な女性像がきめ細かな筆致で描かれるようになっていく。こういった文学史上の変遷が、魯迅一人の中で再現されているかのようで殊の外、考えさせられる。

また「藤野先生」の位置づけも興味深い。「三・一八惨案」（一九二六）後魯迅は北京を離れ厦門に逃れる。この頃の魯迅は、「過渡的知識人」としての生き方について模索・探求の時期にあった。「藤野先生」はこの時に書かれた。恩師藤野先生の思い出は、魯迅を励まし奮起させるものであった。魯迅の奮闘において、藤野先生の存在がいかに大きなものであったかが、ここには指摘されている。ここで私が想起するのは、著者在職中のお姿である。著者は日本人学生のみならず中国人留学生に対しても親身になって研究指導、アドバイスをされていた。現在本国に戻って活躍する嘗ての留学生達にとって著者の存在は、「藤野先生」のような、大きな「励まし」となっているのではないか。本書を構成する論文の中には、中国語に翻訳されているものが複数ある。そしてその訳者の中には、嘗て著者の下で研鑽を積み、その後中国で大成した研究者もおられるようだ。「藤野先生と魯迅」、著者と留学生、ここには同じ絆があるように思われたことであった。